◆研究者：守田 亮（ﾓﾘﾀ ﾘｮｳ）先生 / 秋田厚生医療センター 呼吸器内科
◆研究テーマ： 医療過疎地域における、病院・診療所・在宅診療を含めた多職種チーム形成によるがん診療ネットワーク構築の研究
◆助成金額：50 万円

１．研究者になろうとしたきっかけ
これまで秋田県で肺がん診療を中心に勤務していました。その際にがん診療の標準化や情報伝達・収集の問題、医師の偏在化などの問題に直面しました。その後、国立がん研究センター中央病院で勤務し、素晴らしい医療環境を確認すると同時に、このような医療環境を少しでも東北の各地域に届けたいと思うようになりました。また東北地方以外にも同様の問題に直面している地域が多くあることに気づきました。抗がん剤や医療機器の開発とは別に、多職種連携や病院間を越えた新しいシステムを開発することで医療資源の少ない地域の方々にも最善の医療を届けられるようになりたいと考え研究を行っています。

２．助成研究の内容紹介
前回助成をいただいた私の計画した研究は、医療者の不足を解消する事および都市部にある大規模医療施設との連携強化の点から検討しました。医療者が不足している地域医療の中で、病院の枠組みを超えて多職種連携を進めることで、必要な患者さんを可能な限り身近で適切な医療機関で対応することで医療の質を高めることができるような連携体制を構築する研究を立案していました。ただその目的は昨今のコロナウィルス感染の蔓延により、自然と人の動きが制限されデジタルコンテンツを用いた医療が広がってきました。ただ同時に面会制限など含めた、これまで当たり前のようにあった身近な人とのつながりに距離を生む結果にもなりました。その中で自分らしく生きながら治療と向き合っていく事に在宅との関りの意味も大きくなってきたと考えます。今回デジタルコンテンツを用いて医療の近点化を図りつつ、在宅医療と病院をうまく結びつけることでコロナ禍でも質の高く患者さんの満足できる医療環境を整えられるような研究を検討しました。

３．２の将来に繋がる結果予想・目標
病院を越え、かつ多職種で連携できることにより地域のがん患者さんにより質の高い医療を提供する事ができる。また病院の規模に関わらず患者さんの状態にあわせて質の高い医療を提供する事により、患者さんの一極集中を防ぐことができる。
また Web 環境などを利用して大規模施設と連携をとることにより、地域の患者さんにも治療選択の幅を広げ、適切な治療を受ける機会を増やすことにつながる。その上で在宅医療とうまく連携することで、質の高く満足いく環境を準備して治療を行えるようになると考えます。これらの結果は、日本各地の同様の問題を抱える地域のモデルケースになることができると考えます。

４．全国の RFL 関係者に一言メッセージ

コロナ禍で対面でのリレー開催が難しい中、日本全国の患者さんを支えようと活動されている RFL の皆様に感謝申し上げます。それぞれの御活動を支援するとともに、よりよき医療環境構築のために精一杯務めさせていただきます。